

Contents

15 ▶ 足立区・北千住
▶ 出版社

センジュ出版



バリキャリ編集者が一転、 6畳2間の極小出版社を立ち上げた理由

株式会社センジュ出版

代表取締役 吉満 明子さん Akiko Yoshimitsu

下町情緒あふれる足立区千住の路地にたたずむ、古びたアパートの2階。ちゃぶ台の置かれた6畳ほどの和室に並ぶ数十冊の本、コーヒーと焼き菓子。ここは、街の小さな出版社「センジュ出版」が開くブックカフェです。代表の吉満明子さんは、ブックカフェを訪れた人との会話を楽しみながら、隣接する事務所で書籍の編集や街のイベント企画を手がけています。

以前は出版社に勤め、バリキャリ編集者として働いていたという吉満さん。なぜ千住で出版社を興すことになったのでしょうか？創業ストーリーを教えてくださいました。▶



6畳の和室スペースにカフェを併設。読書会やイベントなども行う。

「大事なものを失っているのかも」

▶ 現在の事業概要を教えてください。

まずは、書籍の企画編集と出版です。これまでに俳優の斎藤工さんに推薦いただいた『ゆめのはいたつにん』（教来石小織著／3刷）、詩人の谷川俊太郎さんに推薦いただいた『いのちのやくそく なんのために生まれるの?』（池川明・上田サトシ著／3刷）などの本を出版しています。

次に、千住の企業や商店街などのPRやイベント企画。紙で人とまちをつなげる「千住紙ものフェス」といったイベントを地域の印刷

会社の皆さんと一緒に運営したり、著者を招いたオープンスクール（センジュのがっこう）を開催したりしてきました。

また、事務所にはブックカフェ「book cafe SENJU PLACE」を併設しています。ハンドドリップコーヒーと焼き菓子、そして数十冊の本をご用意してお客様をお迎えし、レンタルスペースとしてもご利用いただいています。

▶ いつ頃、どのようなきっかけで創業したのでしょうか？

創業したのは2015年9月です。創業前は、編集プロダクションの仕事や出版社の立ち上げを経て、スタート出版書籍編集部の副編集長として、文庫事業のプロジェクトリーダーとして働いていました。

当時好きだった言葉は「弱肉強食」です(笑)。今の姿からは想像できないかもしれませんが、ヒョウ柄の服を着て、ハイヒールを履いて、つけまつげにネイルもパッチリでした。

転機になったもののひとつは東日本大震災です。あの日の帰り道、隅田川の橋を越えると住民同士が「大変だったね」とお互いをいたわっていました。でも、私はその輪に入らなかった。ずっと仕事漬けで、街にどんな人が住んでいるか、どんなお店があるかも知らなかったんです。

「私は何か大事なものを失っているのかもしれない」と思い、もう少し地域に関わりたと思うようになりました。それから、「自分が死んだ後も残るような仕事したい」とも考えるようになったんです。その頃、編集長にもなり、少し業務内容が変わっていった頃でしたので、そうした考えも頭によぎったのだと思います。

「二軍落ち」から 地域の魅力に気づく

もうひとつの転機は妊娠・出産です。子どもという存在ができて、仕事一辺倒というそれまでの働き方や脳の使い方ができなくなった。最初は「二軍落ちしたな」と思いました。

その後、少しずつ母になる自分を意識することができてきた産休中、平日の日に千住の街を歩いてみると、商店街が驚くほど元気で魅力があって。編集者として、住民目線で見た千住の豊かさ、面白さを、いつか地域内外の人に伝えたいと思うようになりました。

育休が明けて1年は職場復帰して時短勤務していましたが、仕事と子育てを両立するために職場と家の距離を近くしたいという想いも募



出版社に併設されたカフェで出している焼き菓子。



り、家から5分の場所に事務所を構えて独立しました。

世話になったのが足立区の創業支援制度です。担当者の方に熱意を伝えると共感してくださって、審査を通すための事業計画書の書き方など、とても親身に相談に乗ってくれました。

目の前の一人ひとりを大切に

▶ **創業にあたってはどんな準備をしたのでしょうか。また、支援は何か受けましたか？**

事務所兼ブックカフェのリノベーションには150万円かかりましたが、それは手持ちの資金で対応できました。ただ、本の製作原価が残らなかったんです。そこで、地元の信用金庫さんから200万円借りました。そのときお

▶ **事業を続ける上で大事にしていることはありますか？**

ひとつひとつに嘘をつかず、誠意を尽くすということでしょうか。例えば、集荷や配達に来られる宅配業者さんも、たくさんお金を使っていたくお客さんも、センジュ出版にとっては大切な人になりません。明日センジュ出版の本を買ってくれるかもしれないし、誰かにセンジュ出版の話をしてくれるかもしれません。そういう緊張感をいつも忘れないようにしたい。



吉満さんが編集し、センジュ出版で刊行した書籍。2018年9月時点の最新刊は、書き下ろし長編小説『ハイツひなげし』（古川誠著）。

私たちのような小さな出版社は、目の前の一人ひとりを大事にしないとイケない。そう思っています。

自分が選んだ場所で根を張る

▶ 最後に、東東京で創業したい人に向けてメッセージをお願いします。

私自身は事務所を地域に開いたことで様々な人と出会えましたし、それが仕事にもつながりました。足立区がPRを後押ししてくださったこともあり、メディアに何度も取り上げられています。地域の方々のご協力がなければ、センジュ出版という小さな出版社の存在をこんなに多くの人に知ってもらうことはできなかったでしょう。

千住で仕事をしてきて感じているのは、「都心にいないと仕事が出来ない」というのはもう古い考えなんだな、ということ。だから、「自分が選んだ場所を等身大で楽しんでほしい」とお伝えしたいです。



地元神社の境内で行われている「千住 紙ものフェス」。

センジュ出版
東京都足立区千住3-16 2F <http://senju-pub.com>

書籍や雑誌の企画・編集・製作、および出版・販売を手がける。刊行物に『ゆめのはいたつにん』『いのちのやくそく なんのために生まれるの?』『子どもたちの光るこえ』『千住クレイジーボーイズ』『ハイツひなげし』など。紙で人と街をつなげる「千住 紙ものフェス」や「センジュの学校」など、街に根ざしたイベントを企画・運営。

book cafe SENJU PLACE：センジュ出版内にある、コーヒー・紅茶と焼き菓子のあるカフェ。センジュ出版の本やおすすめの本、作家さんの作品などの雑貨を販売。カフェ内の本は、販売品以外は読み放題（不定休のため、営業時間は要問い合わせ）。<http://senju-pub.com/shop>